

Title	Contextual Sensitivityを『見える化』する「適正テスト」（ロシア語版）実施に関する考察：バイリンガルの受検者の立場から
Author(s)	グリゴリー, ミソチコ
Citation	ISOコミュニティ通訳認証実績報告書. p.11-p.20
Issue Date	2022-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87470
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Contextual Sensitivity を『見える化』する「適正テスト」

(ロシア語版) 実施に関する考察

—バイリンガルの受検者の立場から—

京都外国語大学外国語学部ロシア語学科准教授

ミソチコ・グリゴリー

1. はじめに

本稿では ISO コミュニティ通訳認証言語チェック・テストである Contextual Sensitivity を『見える化』する「適正テスト」(以下:「適正テスト」)(ロシア語版)の展望と課題について分析する。「適正テスト」は、大阪観光大学が認証機関となり、国際規格『ISO13611:2014 Interpreting – Guidelines for community interpreting (通訳 – コミュニティ通訳のためのガイドライン)』¹に適合する通訳サービス提供者(ISP)に認証授与を行うために開発されたものである。当初は日本語と英語、ポルトガル語、中国語の4か国語の言語組み合わせのテストが実施されていたが²、筆者は日本語とロシア語の新たな組み合わせによる、ロシア語版のテストを2021年12月3日(金)に試行的に受検し、本稿では、バイリンガルの受検者の立場から考察を加えたい。

ここでいう contextual sensitivity とは、「文脈を汲み取る感受性」のことであり、「適正テスト」の開発者は、コミュニティ通訳者が行う「橋渡し」の際に両言語の contextual sensitivity が大いに求められるとしている³。以上を踏まえ、「適正テスト」は、コミュニティ通訳の能力そのものを直接的に測るものではなく、コミュニティ通訳を行う上で不可欠な「双方向言語運用能力 (interactive competence)」、とりわけ contextual sensitivity に基づく双方向性運用能力を測るものであるといえる⁴。大阪観光大学は、「適正テスト」80%達成度 (CEFR B2 レベル相当) を以って、『ISO13611:2014』認証取得要件とし、審査を経た後に認証授与を行っている⁵。

2. オンライン形式の「適正テスト」の概要

ロシア語以外の言語組み合わせによる「適正テスト」は、2020年度までは対面式の紙媒体で実施されていたが、2020年度以降、日本以外の国からの受検希望およびコロナ禍の状況を考慮し、オンライン形式で実施するようになった。筆者が受けた試験もこの形式であった（合計制限時間90分）。オンライン形式では、パワーポイントで作成された問題1～4が画面表示され、受験者はGoogle Form形式の解答用紙に解答をしていく⁶。この際、パワーポイントの画面と解答用紙の画面を同時に閲覧できるような工夫をしない限り、2つの画面を随時に切り替えなければいけないことになる。各問題は2つのセクションから構成され、解答用紙はセクションごとに異なり、毎回氏名・所属を記入必要がある（合計8つのセクション）。

図1 ヒアリングの選択肢例

ロシア語:	
a невиданного историчного максимума	b невиданного историчного максимума
c невиданного историчного максимума	d невиданного историчного максимума
日本語:	
a 消防署や警察署の指示に従って	b 消防や警察の指示に従って
c 消防と警察の指示に従い	d 消防所や警察所の指示に従って

出典：2021年12月3日の試験資料（未公表）をもとに作成

表1 ヒアリング問題（セクションI）の設問数および制限時間

		設問数*	制限時間*	一問あたりの制限時間*
問題1：気候変動・生態系保全	ロシア語	10問	5分	30秒
問題2：自然災害・紛争	日本語	5問	5分	1分

問題 3 : 感染症	ロシア語	10 問	5 分	30 秒
問題 4 : 観光	日本語	15 問 (8 問+7 問)	6 分 (3 分+3 分)	24 秒 (22.5 / 25.7)

*括弧内は画面ごとの数値である

出典：2021 年 12 月 3 日の試験資料（未公表）をもとに作成

各問題のセクション I はヒアリング問題であり，受検者はロシア語または日本語の文章の音読を 3 回（速度：通常→ゆっくり [単語，フレーズで区切る] →通常）聴いた後，自らのノートテイキングに基づき，ヒアリング文の一部を選択肢 a～d から選択肢を選び，文章を復元しなければいけない⁷（選択肢例：図 1 参照）。

復元の対象となる設問数，並びに解答にあてられた時間は，問題によって大きく異なり，表 1 のとおりであった。

各問題のセクション II では，セクション I で聴いたテキストの翻訳文（ロシア語のヒアリングの後には和訳文，日本語のヒアリングの後には露訳文）が穴あき文の形で提示され，括弧内に入れる適切な翻訳文を選択肢 a～d から選ぶ⁸。

穴あき文には（ 1 ）（ 2 ）（ 3 ）と，連番で番号が振られているが，同一表現が文章の中で再び登場する場合は，初出の番号の穴あき文として表示される。穴埋め翻訳問題の例は，図 2 のとおりである。

表 2 穴埋め翻訳問題（セクション II）の設問数および制限時間

		設問数*	制限時間*	一問あたりの秒数*
問題 1 : 気候変動・生態系保全	露→日	16 問 (8 問+8 問)	8 分 30 秒 (4:15+4:15)	31.9 秒 (31.9 / 31.9)
問題 2 : 自然災害・紛争	日→露	28 問 (10 問+10 問+8 問)	12 分 30 秒 (4:15+4:15+4:00)	26.8 秒 (25.5 / 25.5 / 30.0)
問題 3 : 感染症	露→日	20 問 (10 問+10 問)	9 分 (4:30+4:30)	27.0 秒 (27.0 / 27.0)
問題 4 : 観光	日→露	36 問 (10 問+10 問+10 問+6 問)	16 分 30 秒 (4:15+4:15+4:15+3:45)	27.5 秒 (25.5 / 25.5 / 25.5 / 28.1)

*括弧内は画面ごとの数値である

出典：2021年12月3日の試験資料（未公表）をもとに作成

一つの画面には、最大で10程度の設問しか表示できないため、例えば、図2の翻訳文の20番台の選択肢を選ぶ画面では、10番台の選択肢は表示されず、一つ前の画面で解答済みの(17)～(19)にあたる文を復元するのにやや手間がかかる。

図2 穴埋め翻訳問題の例（抜粋）

Среди (25) и (26), повлиявших на то, что количество иностранных туристов, (16) Японию, (17) (18), можно назвать (27) визовых (28), запуск и (29) инициативы «Визит Джэпэн», включающей в себя (30) от (31) и другие меры, а также (32) (33) иены по отношению к доллару и евро, равно как (27) и снятие различного рода (34) на внутреннем рынке (35) услуг (36) стран.

出典：2021年12月3日の試験資料（未公表）を基に作成

問題1～問題4の合計の設問数は140である（ヒアリング40問、翻訳100問）。ヒアリング問題の内訳は、ロシア語20問、日本語20問である。また、翻訳問題のうち、露→日が36問、日→露が64問である。後者が前者を1.77倍上回っていることがうかがえる。

3. 適正テストの展望と課題

本「適正テスト」の最も重要な利点は、日本語とロシア語という言語組み合わせにおいて、双方向言語運用能力を測るツールを提供している点にあると思われる。問題1と問題3がロシア語のヒアリング問題とロシア語から日本語への穴埋め翻訳問題、問題2と問題4が日本語のヒアリング問題と日本語からロシア語への穴埋め翻訳問題となっており、このテストは、ロシア語学習者、日本語学習者またはバイリンガルといった、あらゆる言語背景の

受検者を対象にできる。すなわち、第1使用言語が日本語（いわゆる日本語母語話者）またはロシア語（いわゆるロシア語母語話者）の受検者に特化したテストではない。「適正テスト」は、現状では日本語による出題となっているが、その点さえ改善されれば（例えば、出題をすべて二言語表示にするなど）、完全に双方向型のテストになるといえよう。

筆者は、両親の第1使用言語がロシア語であるが、物理学の研究者である父親の仕事の関係で、幼少期に2度にわたり来日し、日本の公立小学校を卒業した。その後、学部や大学院のときにも日本に留学し、小学校の4年間と学部時代の1年間、それに大学院以降の約10年間の日本滞在を経験している。合計15年以上の日本滞在歴があるバイリンガルである（第1使用言語はロシア語、第2使用言語は日本語）。また、筆者が京都外国語大学の「総合ロシア語」のクラスで教えた2021年度の学部1～2年生の40人弱のうち4名、約1割はいわゆる「バイリンガル」（第1使用言語が日本語、第2使用言語がロシア語）の学生であり、グローバル化によりバイリンガルとして育つ子どもは今後も増えていくと考えられる。

バイリンガルの定義は多様であるが、ここで重要なのは、二つの言語の熟達度に大きな偏りがみられない「均衡バイリンガル balanced bilingual」⁹はそれほど多くない点である。「適正テスト」により、二言語の contextual sensitivity のバランスを測ることが可能であり、均衡バイリンガルの人ほど、露→日と日→露の翻訳問題の得点差が小さくなることが想定される。様々なバイリンガルを対象にした「適正テスト」の実施が望ましいが、4択問題で言語運用力を測ることの限界もあり、「適正テスト」の更なる改善が今後の課題として挙げられる。また、「均衡バイリンガル」ではないバイリンガル（優勢バイリンガル dominant bilingual 等¹⁰）と、一般学習者の contextual sensitivity のバランスを比較分析していくことにも意義があると思われる。

次に、「適正テスト」の課題として、以下の4点を指摘したい。

第一に、ロシアの言語・文化に特化した問題の導入である。

コミュニティ通訳者が行う「橋渡し」の際、「学習外国語から日本語への通訳・翻訳する能力と日本語から学習外国語への通訳・翻訳する能力をバランスよく、正確に身に付けることが求められる」¹¹。しかし、そのためには、学習者母語の文化（筆者は「第1使用言語」という用語を使いたい）のみならず、学習外国語（＝第2使用言語）の文化に関する知識・理解も同様に深めていかなければいけない。contextual sensitivity の context（文脈）に

は、こうした双方の文化的要素も必然的に入ると考えられる。

現行の「適正テスト」の問題は、他の言語組み合わせと共通の枠組みを使っているため、ロシア語・ロシア文化に関連した情報を含んでいない。すべての4つのヒアリング文(問題1~4)は、日本またはグローバルなアジェンダに関わるものであるほか、問題1と問題3のロシア語のテキストは、実際には日本語のテキストを翻訳して作られたものであり、当然ながら、ロシア語独特な言い回し・発想を含んでいない。将来的には、ロシア(またはロシア語圏)の事情を反映した、かつ日本語からの翻訳文でないテキストの活用を提案したい。

第二に、ヒアリング問題の位置づけである。

ヒアリングの問題(各問題のセクションII)は、通訳・翻訳の作業を伴わないため、セクションIIに比べて極めて単純な能力を測っていることを留意したい。ヒアリング問題のためのノートはセクションIIの解答においても使われるが、ノートテイキングは通訳を行う上で重要な技能であることは間違いない。

しかし、セクションIでは実際の通訳では考えられない、3回の音読(しかも、そのうち1回[2回目]は通常より遅い速度)が行われ、これは通常の通訳メモとは程遠い作業であることを強調したい。「適正テスト」は、実際の通訳とは異なり、セクションIおよびセクションIIのすべての問題を正しく解答するためには、ヒアリング文をほぼ文字通り書き起こす必要がある。実に3回もの音読が想定されたのはそのためだと考えられる。

これに関して一つ気になるのが、ロシア語の音読の速さが日本語に比べてやや遅く感じられた点である。これは、他の言語組み合わせの音読も参照しながら、検討すべき点であるが、仮に音読の速さが日本語=学習者母語(第1使用言語)、ロシア語=学習外国語(第2使用言語)という位置づけをベースに決められているのなら、この「適正テスト」で contextual sensitivity の正確なバランスを測ることは困難であろう。

第三に、セクションIおよびセクションIIにおける選択肢の設定方法である。

まず、セクションIでは、非常にまれではあるが、綴り字を重視した問題が見受けられ、「適正テスト」としてふさわしい問題なのかやや疑問がある(例えば, двуокиси углерода と двуокиси углерода や ископаемого топлива と ископаемого топлива など¹²⁾。とりわけ、2つ目のペアに関しては、正解と不正解の発音は全く同じである。

また、意味も書き方も酷似し、通常の通訳メモでは判別が困難な選択肢が入っている問題

で考慮した上で、総合的に判断しなければいけないが、そのためには問題の難易度を比較するための基準が求められる。全体としては、より複雑な作業を想定しているセクション II の一問あたりの時間の比率を上げることに検討の余地があるかもしれない。

4. おわりに

上述のように、セクション I のヒアリング問題は、従来の通訳メモ以上の正確さを求められており、セクション II の穴埋め翻訳問題も、自ら行う通訳とはかなり違った作業となるため、この問題を解く鍵も、従来のノートテイキングとは多少違う工夫にあるといえよう。受験者がこうした工夫を練習することは不可能ではないが、そのためには、「適正テスト」の過去問を公表し、試験内容を毎回更新しなければいけない。「適正テスト」のこうした変革が現実的であるか分からないが、いずれにしても、本テストは既に極めて革新的な営みとなっており、今後の持続的発展が期待される。

(投稿日：2022年3月3日)
(受理日：2022年3月13日)

-
- ¹ ISO, 2014. 『ISO13611:2014 Interpreting — Guidelines for community interpreting (通訳—コミュニティ通訳のためのガイドライン)』日本規格協会, 東京. p. 2.
 - ² 佐藤晶子, 小森三恵, 林田雅至 (2022) 「高等教育機関の認証授与および言語運用能力を測る適正テスト実施に関する考察—『ISO13611:2014 通訳—コミュニティ通訳に関するガイドライン』の視座より—」『大阪観光大学研究論集』第 22 号, 43-50 頁.
 - ³ 林田雅至 (2019) 「外国語学習における媒介語の重要性」平成 30 年度大阪大学外国語学部ロシア語専攻主催国際合同会議実施報告書『国際語としてのロシア語：国際統一基準による言語能力レベル評価システム構築の現状と将来的課題』, 61-71 頁.
 - ⁴ 林田雅至, 印南敬介 (2018) 「グローバル外国語教育に不可欠な『高度汎用力』の原点: interactive competence を支える『スクライビング』実践報告」, 『Co*Design』第 3 号, 79-95 頁.
 - ⁵ 林田ら (2022) 前掲論文参照, 同上.
 - ⁶ 同上.
 - ⁷ 同上.
 - ⁸ 同上.
 - ⁹ Baker C. (2001), *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism (3rd ed.)*. Clevedon: Multilingual Matters LTD, pp. 2-10 を参照.
 - ¹⁰ 同上.
 - ¹¹ 林田(2019)前掲論文を参照.
 - ¹² 出典：2021 年 12 月 3 日の試験資料 (未公表) をもとに作成.
 - ¹³ 同上.